

社会文教常任委員会 所管事務調査報告書

平成29年12月12日

富士見町議会
議長 五味平一 殿

社会文教常任委員会
副委員長 川合弘人

社会文教常任委員会が平成29年10月31日と11月1日、埼玉県内を訪問した所管事務調査の結果を下記の通り報告します。10月31日は埼玉県秩父郡皆野町の「認定NPO法人 花の森こども園」、11月1日は埼玉県比企郡川島町を訪問しました。それぞれ、個別に記します。

【森のようちえん 認定NPO法人花の森こども園】

記

訪問日 10月31日
訪問先 森のようちえん 認定NPO法人「花の森こども園」
視察のテーマ 幼児期からの環境教育
説明者 代表理事の葎田（よしだ）あきこさん
視察参加議員 小林市子、名取武一、織田昭雄、小池勇、五味平一、川合弘人

1. 視察の目的

長野県次世代サポート課の竹内延彦さんから、「花の森のこども園」を紹介されました。自然や動物とふれあいながら伸び伸びと過ごす子どもたちの姿に接することで、幼児期からの環境教育で得られるものを学びたいと、視察を決めました。

2. 花の森こども園が誕生した経過

皆野町のムクゲ自然公園内に2008年に開園しました。今年で10周年です。代表理事の葎田さんによると、秩父市内の幼稚園が、経営者の交代により、教育方針が大きく変わったことをきっかけに、「遊びを中心とした幼稚園がなくなってしまう。子どもたちを自由に育てたい」と一部の保護者と一緒に幼稚園を離脱して団結。母親たちと一緒にこども園を創設しました。普通のお母さんたちが森の中に「ようちえん」をつくってしまいました。園の場所は、森を含めて支援者から無償で提供されました。「ママ友の協力でこの場所を紹介してもらって始めた」ということです。園は無認可で、公的支援はなく、資金源は保育料やNPOの賛助会費などです。通園するのは2歳から就学前までの22人。秩父郡市が中心だが、遠く深谷市、川越市から通う子どももいます。

3. 子どもたちの生活

自然に直に触れ、園児自らが「体験」することを大切にしています。自然体験の教

育です。山の中を駆け巡り、木に登り、「伸び伸びと園児たちにたくさんのことを学んでもらう」というスタンスです。自然の中で子どもたちを育てることを理念としています。知識を詰め込むのではなく、ヤギやウサギと触れ合ったり、木登りを楽しんだり。ほかの園になじめなかった子も次第に自分の居場所を見つけています。

4. 代表理事の葎田あきこさんから学んだこと

葎田さんは「学習よりも前に、感じ取ることが大切」とこども園の意義を語りました。「信頼関係が子どもたちの意欲をつくる」とし、信頼する大人が周りにいることが、非行の抑止力にもなっていると言います。自然の中で育つ子どもは「自己肯定感」が高まるそうです。子どもたちが自立するためには、「自分で選ぶ」ことが大事で、与えられたものに従うのではなく、幼児期に自分で選択し、責任を負うことが自信になると言います。それが社会生活につながると語りました。

5. まとめ

認定NPO法人花の森こども園は、この10年間、同じ敷地内に、不登校やニート、引きこもりの若者たちの働く場として「居場所 かなりや」や、「多世代交流カフェ ゆいっこ」、小中学生の生活、学習支援のための「学び合いの場 てらこや」も開設しました。地域に貢献しようと、幅広い活動を展開しています。事業費の調達にはクラウドファンディングも活用しています。

自然の中で心と体を鍛え、仲間との遊びの中で豊かな感性と表現を身につける。自然に親しむことを教育の中心に掲げています。都心に近い場所にありながら、多くの自然が残っている町だからこそ、可能となる教育です。それを見事に実践しています。自然の中で育った子どもたちは、自然の大切さを大人になっても感じていると思います。富士見町も自然豊かな町です。自然の中で自然を教材にしながら子どもたちを育てるという意識を持ち続けてほしいと思いました。

以上

【川島町】

記

訪問日 11月1日
訪問先 埼玉県比企郡川島町役場
視察のテーマ 「地域包括ケアシステムモデル事業」の取り組み
説明者 川島町健康福祉課職員
視察参加議員 同上

1. 視察の目的

住み慣れた地域で、いつまでも暮らせる仕組みづくりである「地域包括ケアシステムモデル事業」をいち早く取り入れ、実践している川島町を、先進地として参考にしたい。

2. 川島町の現状

川島町は、圏央道が中心部を横切る位置にあります。人口は2万600人で、65歳以上の高齢者に占める割合、高齢化率は31.4%。富士見町の33.2%を若干下回っています。生産年齢人口は年々減少し、高齢者人口は増加傾向です。平成37年には前期高齢者と後期高齢者の比率が逆転し、後期高齢者の人口が上回ると予想。高齢化率は38.6%に達するとみています。要介護認定者は今後10年間で1.5倍に増加すると見込んでいます。介護保険料は第1期から現状の第6期までの17年間で2倍に上がりました。

後期高齢者、高齢の単身・夫婦世帯、認知症高齢者が増加する中で、自立支援、介護予防、生活支援の三つを柱とするモデル事業に着手しました。事業費は1000万円で、このうち900万円が補助金です。

3. 自立支援

個別課題の解決、ネットワークの構築、地域課題の発見—などを目的に「地域ケア会議」を立ち上げました。自立支援のためのケアマネジメントの質の向上を目指し、関係者の意識を共有する場としました。

4. 介護予防

介護状態とならないために、「かわべえいきいき体操」を考案しました。高知県の「いきいき百歳体操」と同じで、重りと椅子を使った筋力アップのための体操です。集会所単位で実施することで、地域の「通いの場」となり、お互いに声を掛け合うことで閉じこもり防止も狙いました。サポーター養成講座（全8回）で、第1期生35人が誕生。2年目の29年度は第2期養成講座で25人のサポーターが誕生しました。「かわべえいきいき体操」は健康な人から生活の大部分に手助けが必要とするお年寄りまで、「若返りサロン」は虚弱高齢者などに、住民に根付いている「ハッピー体操」は健康な人と虚弱な高齢者まで、「こっこっクラブ」は生活の一部に手助けが必要とする人まで—と、対象者の元気度により、介護予防の方法にすみわけを設けました。

5. 生活支援

「助け合い・暮らしやすい地域づくり」を目的に、ごみ出しのお手伝い、ちょっとした見守りなど、一人ひとりが自分にできることに取り組んでいます。8月31日には「町民フォーラム」を開き、高齢者を取り巻く状況の周知、地域支え合い活動の必要性の周知と参加の呼び掛けを行いました。

フォーラムでは500人定員の会場に550人が来場。「自分らしく生きられる福祉のまち川島」の実現に向けて、「住民主体の支え合い、助け合い」の地域づくりの大切さ、やりがいを一緒に考えました。

平成29年9月、10月には全3回の「支え合いを考える会」を開きました。標語を作成し、地域課題と必要な活動を検討。最終回は活動創出に向けた「話し合いの場の構成員」育成も検討課題として論議しました。

6. まとめ

川島町は、平成28年度からスタートした地域包括ケアシステムモデル事業の取り組みを活かしていくことで、「健康と生きがいを地域で支えるまちづくり」を推進する方針です。超高齢化社会の到来は、かつて日本が経験したことのない新しい社会であり、自治体はそれに立ち向かわねばなりません。高齢者が住み慣れた地域でいつまでも暮らせる仕組みの構築は、富士見町にも求められることです。地域が協力し合い、地域力を高めながら、健康寿命を延ばすための取り組みに力を入れ、住民の意識を高めていくことも大切です。川島町の先進的な取り組みは、今後の富士見町を考える上でも大いに参考になりました。

以上



花の森こども園で、代表理事の葭田あきこさん(左)から話を聞く社会文教常任委員会委員



埼玉県 川島町役場で話を聞く社会文教常任委員会委員



埼玉県 川島町役場にて